



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2021年11月7日

№. 90

このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪びとから離され、
もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、
わたしたらにとって必要な方なのです。

ヘブライ人への手紙 7章26節



礼拝献花より

御言葉に生きる

あなたの御言葉は、わたしのものとなり わたしの心は喜び躍りました。

エレミヤ書 15章 16節b

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『道の行き先』

牧師 佐藤和宏

マルコ10章46～52節

イエスにいやされることになるバルティマイは道端に座っていました。イエスのいやしの意味を明確にするために、2つの点が欠かせません。

第一に、「エリコの町に着いた」イエスはさまざま「エリコを出て行く」とされた」という不自然な記述です。これはエリコからどこへ向かうかということを確認するためでした。その行き先は、続く11章でエルサレム、すなわち十字架があると明らかにされています。盲人バルティマイは、旅の途中のイエスに出会ったのではなく、十字架への道を行かれるイエスに出会い、いやされたのです。この事実、盲人がいやされたという、今日の出来事と十字架の出来事は直結しているということを、私たちに教えています。

第二に、バルティマイは「道端」に座っていたということについてですが、十字架への道を歩まれるイエ

スに對して、この人が「道端」に座っていたと描かれているのは、重要な意味を含んでいます。ギリシャ語を直訳すると、これは「道端」ではなく「道のそば」となっているのです。「道端」も「道のそば」も同じようだと思われるでしょう。しかし現在と違った状況にある、聖書の世界を想像しますと、「道端」と「道のそば」とは意味合いに大きなちがひがあると想像できるのです。つまり「道端」は、道の端ということになりますから、広い意味で言えば、それも道の上となるのです。これに對して「道のそば」とは、道の近くではあるのですが、決して道の上ではないということを確認に言い表しているのです。ここで言及されている道が、十字架への道であるならば、なおさらその道の上にいるのか、それとも道の近くにはいるがその上にいないのかは、大きな違いを示していることがわかるのです。

イエス一行がエリコの町を出て、エルサレムへ、すなわち十字架への道を歩み始められたとき、その道の近くに座っていた一人の盲人、バルティマイが「あわれんでください」

と叫んだ。イエスが呼び寄せ。すなわち十字架へと続く道の上に、この人を呼び寄せ、「何をしてほしいか」と尋ね、この人は「見えるようになりたいのです」と答えたのでした。

ここで少し考えたいのは、十字架への道の上に呼び寄せられたこの盲人が、見えるようになったのは何かということ。見えるようにされた、この人がとつた行動が、その見えたものは何かを明らかにしています。見えるようにされたバルティマイは「なお道を進まれるイエスに従った」のでした。道の近くに座っていたこの人が見えるようにされたのは、十字架への道でした。道の近くにはいたはずなのですが、この人にはその道が見えなかったのです。

皆さん、今日福音の日課に登場しているバルティマイは、2千年前に生きた、一人の盲人ということではありません。この人は、今を生きている私たちではないでしょうか。日々の生活の中で、私たちは道の近くに生きています。またその道が十字架へと続く道であるということが見えていな、い一人ひとりに過ぎないので、自分では何一つできずに、ただ

座って生きていることが少なくないと言えるでしょう。そのように道の近くに座っている者の近くを、十字架の主が通ってくださいなのです。

「エリコに着いた一行が、エリコの町を出る」という不自然な表現は、この人に会いたい、その叫ぶ声を聞き、十字架へと続く道の上に招き、その道が見えるようにしたい。このように望まれたイエスの思いが、その不自然さの中に示されているのです。私たちは物事が自然に流れることを好むでしょうが、神は御子イエスを通して、不自然に思える形で、御心を表されたのでした。御子を十字架へと至らせ、その死によって、私たちがすべての罪を赦された。私たち人間からするなら、実に不自然に思われる方法を用いて、神の救いは実現されたのです。この救いは私たちを新たにし、共に十字架への道を歩かせるのです。キリストが私のために歩まれた道ですから、それはもはや自分のためではなく、誰かのために歩む道なのです。私たち教会の群れは、誰かのために仕える道を、今日も共に歩み始めるのです。

(聖霊降臨後第22主日)

○野○子

聖書を初めて開いた時、カタカナの名前が並び、意味が解せず無知だった私の手を取るように導いて下さったノルウェー人のレイフ・サロモンセン宣教師。背が高く、彫りが深く、澄んだ美しい目の彼に憧れて、礼拝の席は女性で一杯だった。私もその一人。しかし先生が国にお帰りになり、83歳で世を去るまで交流が続いたのは私と、同じように伝道師として遣わされた男性だけだったように思える。今から十数年前、師が遠い地から病のなか電話を下さった時、泣きながら共に祈った。83歳で師が御国に召されたとき、私は涙で暮れた。

振り返ると、我が儘な私を兄か父のように接し、温かい食事や温かい布団で泊めて下さったサロモンセン夫妻。奈良刑務所を出所してきた青年を代わる代わる迎え、ガレージを宿に造りかえて住ませ、信仰に目覚めさせ回心させて社会に送り出さ

れた。そんな宣教師を見て、町の人には好意を持ち、やがて迎え入れた。師は、信仰のイロハも知らない私にイエス・キリストを示し、十字架と復活、永遠の生命への喜びの道を懇切丁寧に導いて下さった。その頃の不信仰な私は、なかなか理性では受け入れられず、よく反対した。しかし、師はただ聖書を指し示し、黙って祈り導き待つて下さった。

時が経ち、娘も息子も与えられ、金魚のフンの様に教会に連なり導かれた半世紀、聖霊の働きの奇跡を思わずにはいられない。

主人は結婚から十年後、小教理大教理まで2年間学び、信仰を受け入れ、私は涙で主人の洗礼の日を迎えた。

前後するが、60年余り前未熟ながら伝道師をしていた頃に出会ったCSの子ども達と、今日まで交わりがあることを思うとき、信仰の伝達の大切さを思わずにはいられない。(CSの先生には、一人でも多く懇切丁寧に子ども達に主の愛を伝え、主に連なる信仰者に育てて頂きたいと願うものです。)

私がただ従ったのではなく、神が

捉えて下さった。聖霊の働きの見えない神の愛をひしひしと思わずにはいられない。ほむべきかな、主の愛と導き。唯々うれしく感謝に絶えない。

私の今日までの歩みに、数多い罪、背信、どれほど神様を裏切ったことか。でも、神様はその罪をイエス様の十字架のあがないで、白く、雪よりも白くし、永遠の命を与え、天に迎えて下さる。深い愛の中に今日も生かされている、この大なる愛

主にある良き仲間 「○内姉」を偲ぶ!

○嘉匡○

私が○内姉と出会ったのは今から38年前(1983年7月ごろ)と記憶しています。当時ルーテル教会では開拓伝道熱が沸騰して、東教区でも北海道、東北、東京2か所、城南神奈川地区でも10の教会で1つの教会を生み出そうとのスローガンの下開拓伝道がスタートいたしました。田園都市線沿線開拓伝道委員会が組織され、用地探しが始まりました。沿線の土地が高騰して予算的にも広さ的にも適当なところが見つからず、委員会が頭を悩ましていたこ

と平安を、この世を去る日まで伝達する器でありたいと願っています。感謝。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。

使徒言行録 16章31節

わたしは復活であり命である。私を信じるものは死んでも生きる。

ヨハネによる福音書 11章25節 (了)

ろに竹内姉から現在地(藤が丘)の提案があり、立地条件も良く購入交渉に着手することになりました。○内姉の根回しのお陰で予算内購入が出来ました。(1983年9月)

約2年半話し合われた開拓伝道教会計画が一気に動き出し、購入地に建っていた古い民家に江口先生家族が引っ越してこられ、間をおかずプレハブ教会が建ち11月27日から藤が丘教会のスタートとなりました。家庭集会(家の教会)から寄せ集められた参加者(35名〜40名)は、地

域との接点がない人ばかりでしたので○内姉、田○姉がコーディネーター役を下さり友好的で親密な関係だったと思います。

約5年プレハブでの教会伝道活動が続きましたが、狭くて十分な交流が出来ない分を補うかのように、家庭集会(家の教会)が活発になっていきました。ルーテル教会では初めての寄せ集め開拓伝道でしたので物珍しくもあり、見学者がよくおいでになりました。プレハブでは狭いのでゆつくりできません。○内姉の勧めで寺家ふるさと村の旧家(○根宅)見学、丘の上の青山亭での食事のあと茶室をお借りしてお茶をいた

竹内彌生様へ 市○江

藤が丘教会がプレハブの建物の中で礼拝が守られている事を知って、始めて参加させていただきました。教会の事は何も知らない私は暫くの間、只々お客様でした。○内姉はじめ数多くの女性たちがとても美しく輝いてみえました。○内姉は教会の建築に当たり土地の確保に奔

だきながら懇談、海外の方は古い日本に触れて感動してお帰りになりました。

○内姉はおもてなしのツボを心得て、コーディネーターしてくださいました。無知な私はたくさんの方から教わり、アドバイス指導を受けて感謝しております。

教会堂建設工事中の1年間、礼拝は自治会館をお借りすることになりました。公的場所ですので宗教団体がお借りすることは出来ないのです。○内姉、田○姉のお力により、交換条件があったとはいえ1年近くも日曜ごとの礼拝が1日も休まず守れたことは、強力な

走され、見事に藤が丘教会がこの地に主の宮として与えられた事を知りました。

○内姉は上品で、オシャレで、リボンで飾られたヘアネットをいつも被られて、とても素敵でした。時々郵便局でお会いする事がありました。書類をたくさん持って、窓口で番を待っていらっしやいました。その頃はまだ女性会もありませんでした。

コーディネーターの働きかけがあったと私は思っています。自治会活動は、日曜日の午前中はすべて休んでいただいて教会の礼拝に協力してくださいました。教会にとって重要な兄弟姉妹が年と共に主のもとに帰って行かれることは寂しいことではあります。お一人ひとりが残していかれたことを受け取り、次につなげて行かなければなりません。多くのことを教え導いたことに心から感謝をいたしています。主のもとで安らかでありますように、残された者のためにとりなしをしてください。ようにお祈りしています。

主にあつて

たので、教会の仕事の多くをなさっていらしたのだと思います。また教会の入り口のガラスのウィンドウの中には、いつも毛筆で、み言葉を伝達して下さったことも記憶にございます。決して忘れられません。跡に続く者の一人として、心より感謝して居ります。

安らかにお眠り下さいませ。

○内○生さんのこと

藤が丘教会前任牧師の小副川幸孝先生がまとめられた、『藤が丘教会の足跡』(1983年〜2008年)において、○内○生さんが『建築ニュース』に書かれた文章が紹介されていますので、転載いたします。

「田園都市線沿線開拓伝道の一環として、この藤が丘に教会の仮会堂を建てて三年がたちました。礼拝に出席なさる教会員の方々も日増しに上昇線をたどり、今では、会堂の補助椅子も間に合わなくなるほどです。これからは地域住民の方々に関心を持って頂きたく思っていますし、この上は、一日も早い会堂建設に向かつて進んでいかなければならない時期が参ったのではないかと思われます。」

夢のある、ふと誰でも気軽に入ってみたくするような、外国でもよく見られるような、心ときめきを覚えるような教会を心に描いて、神さまの栄光をあらわす『心のセンター』としての証し人になりますよう、また、社会の一隅を照らす者になりた

いと願っております。」

御言葉に生きる 12

私の好きな聖句

〇野〇苑

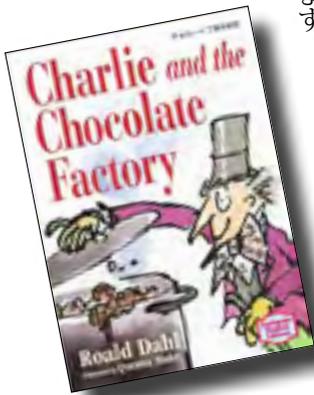
「肥えた牛を食べて憎み合うよりは、青菜の食事であし合う方がよい。」

箴言 15章17節

小さい頃、母は寝る前に本を読んでもくれました。絵本を読んでもらった記憶はないですが、ロアルド・ダールの本を何冊も読んでもらったことはよく覚えています。そのうちの一冊は、「チョコレート工場」の秘密」という本でした。この本では、とある町にあるチョコレート工場の工場主が、自社のチョコレートの中にゴールデンチケットを5枚封入し、チケットを見つけた5人の子ども達を自社に招く、という設定から始まります。チケットを巡って、世界中の裕福な家庭の子ども達は、大量のチョコレートを手に入れながら、チケットを探します。一方、主人公は、毎晩キャベツしか入っていない水っぽいスープしか食べられないような極貧の家庭に生まれた男の子で、チョコレート一つさえ買うお金

がありません。お金はないものの家族愛には恵まれた主人公は、家族に支えられ、たまたま手に入れたチョコレートでチケットが当たり、工場を見学する機会が与えられます。

この本を読んでもらった頃から、我が家では、「キャベツスープしか食べられなくても、お互いがいれば、また、家族が全員安全で健康であれば、幸せ」という考え方が何となく生活の基盤にあったように感じます。それは、神様が全て、私たちのために道を用意してくださっている、と、いつも信じているからだと思えます。そのため、良い時も、厳しい時も、神様の愛を思い出しながら、また、教会の皆様を支えられながら、ここまで来られました。神様、皆様、いつもありがとうございます！ これからも、このことを胸に、前に進んでいきたいと思っています。



私の好きな聖句

佐藤和宏

「喜ぶ人と共に喜び、

泣く人と共に泣きなさい。」

ローマの信徒への手紙 12章15節

「天が地を高く超えているように

わたしの道は、あなたたちの道を

わたしの思いは

あなたたちの思いを、高く超えて

いる。」 イザヤ書55章9節

最初の聖句は、若い頃からの愛唱聖句で、喜ぶ人の喜びをそのまま自分の喜びとし、泣く誰かの悲しみを、私の悲しみとする。なかなかできないことですが、そのようになりたいと願い、この御言葉を人生の目標のようにしてきました。数年前に藤が丘教会の主題聖句にも選ばせていただきました。ちょうどその際、作成したウェブサイトやクリアファイルにも、この聖句が記されています。2番目の聖句は、かつて自らの主題聖句として一年を過ごしたことがあるのですが、その頃からの愛唱聖句になります。

私たちが人間の道を高く超えた、神の道。私たちの思いを高く超えた、神の思い。頭ではわかっているつもりでも、ついつい人生のさまざまな場面で、「わたし」の思いによつて、すべてを押し量ってしまう現実から、抜け出せないものです。

私は神学生の頃、今勉強することよりも、牧師になつてからが勝負と、勝手な考えを胸に抱いていたように思います（勉強をしない言い訳ですね）。ところが、いざ牧師になろうかという時、非常に恐ろしく、逃げ出したくなつたことがあります。勉強していない事実には、神を騙しているような自分を見たのです。祈りに祈り、私に与えられた答えは「私が牧師になるのではなく、神が私を牧師として用いる」というものでした。主語の転換です。その時、肩に重くのしかかっていた何かがつつと抜けるような気がした感覚を、今でも覚えています。

高く超えた神の思い、神の道に生きる。とても難しく、また無責任な生き方に思われます。しかし神の恵みに生かされるとは、こういうことだと実感しています。

江藤先生の講演会

江〇〇子

コロナウイルス感染拡大のため従来通りの礼拝を信徒の方々と共にまもる事が今だにできない中、4月に「学び」が始まりました。

4月第一回は江藤直純先生をお迎えしての講演。第二回は同じく講演と先生の発案による小グループに分かれてのディスカッション。昨年からはポツとしていた頭には大いなる刺激があり、発見もありました。

「教会はキリストの体」というテキストを使い、エフェソ書に沿って学びます。そもそもエフェソ書は、私にとってエペソ書（中高生時代はこのような名前でした）は「おへそみたいな名前だわ!」としか認識がありませんでしたが、まさにチャンス到来で読み始めました。講演で「吉」「事」「家」という三文字についての説明がありました。吉↓吉報、すなわち福音が溢れている。事↓仕える。福音を伝える。家↓神の家族。

明治時代、教会をこの三文字で表し、私達の教会で神様によって呼び

集められた私達家族が集い、共に祈り、福音を述べ伝えると言うお話しは心に残りました。

又、祈りとは神様に語りかけると同時に神様から語られる事も大きく、聖書を通して更に神様の御言葉に耳を傾けると言う先生の言葉からも祈りの大切さを学びました。

ルーテル学院大学・神学校講壇奉仕報告 田〇〇夫

主日礼拝後 11時50分よりズームにて開催されました。テーマは「神道とキリスト教 水と油が」と題して上村敏文先生よりお話をお伺いしました。

上村敏文先生プロフィール
山口県防府市生まれ。

筑波大学第3群社会学類卒業。

その後各方面でご活躍をされ数多くの著書をお持ちです。現在、ルーテル学院大学准教授 専門は、比較文化・比較宗教・文化人類学・国際関係論。その中でも特に日本文化、宗教（特に神道）とキリスト教について長年研究をされており、また、「日本」のキリスト教がいかにしたら根付くか」という生涯の研究課題をお持ち

二回目のグループディスカッションは活発な意見交換もあり、他の方々の教会に対する思いや信仰への道のり、深さもお聞きしました。

さあ、パウロの宣教の旅のように私達も「学び」の時、テキストを通して新たな発見の旅に出発しましょう!!

ちでいらつしやいます。

上村先生は、神道やキリスト教を見てゆく時にそれらを結ぶものとしてギリシャ神話があると、神道では、ギリシャ神話（文化）やイスラエル地方及び中近東文化の影響を受けているとお話をされました。それは古事記が編纂される前にシルクロードを通じて日本にやって来た渡来人によって持ち込まれたものであることは確実だとしながらも、文献主義である歴史学（考古学）的観点からは残念ながら確固たる文献が残されていないことにより証明されな

いとしつつ、文化人類学的な視点からは人々の言い伝えをや伝承記録からは明らかにされているとのことで

した。また、旧約聖書や新約聖書も同様にギリシャ神話から影響を受けて書かれているとし、その箇所を具体的に引用しお話をされました。

①ギリシャ神話と古事記の関係性.. 木村鷹太郎（1870年～1931年）は、ギリシャ神話から古事記は大きな影響を受けたとの論文を発表。しかし、その学説の研究論文に関して現在殆ど残されておらず検証することが難しいとされながらも、間違いのないところであると上村先生は学説を評価され、また古事記の中に出てくる天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）は抽象的な神として描かれており、中西進氏の研究によるとこの神はキリスト教の影響を受けたとしている、とお話をされました。

②古事記に記載されている神々.. 古事記に登場する神々や神社で執り行われている儀式やお祭りを見ると、ギリシャ神話、旧約聖書との関連性を見出すことが出来るとしています。

③ギリシャ神話と聖書の関係性.. 聖書の中にギリシャ神話と考えるような箇所があるとし、始めに創世記6章を取り上げて説明されました。そして、ギリシャ神話のパンドラの箱

に残った「希望」は、新約聖書の第一コリント13章13節「信仰と、希望と、愛」に取り入れられ、また新約聖書がギリシャ語で記されたのは、背景にオリンポスの神々の事が強く意識されていたからだのご指摘もされました。

④結びとして…聴衆の興味・関心を逸らさない絶妙な論理展開と軽快な話術にいつの間にか引き込まれ、あつという間に一時間が過ぎてしまいました。コロナ感染が収束した際には、引き続き同じテーマで持って第二回第三回と企画をしてゆきたいと思わされる素敵なお話でした。

*講演内容の補足資料(DVD)「神が日本に残した指紋Ⅰ&Ⅱ 副題…日本の歴史と文化に、創造神が存在する証拠はあるのでしょうか」がありますのでご希望される方はお知らせください。

また、当日の講演記録もDVD及びUSB(パソコン用)、iPhone用に保管してありますのでこちらも希望される方はお知らせください。尚、当日のレジメがご入用の方は先生までお願いします。

長く続くコロナ禍にあつて、教会では、礼拝グループを2つに分け、人数を制限して礼拝を継続しています。結果、ちがうグループの方には、長らく会うことが出来ません。また、同じグループの方でも、ゆつくりとおしゃべりしたり、食事をするのもできずにいます。集まることを、喜びの一つとして来た、教会の交わりがそれを制限されています。

編集委員会では、今号より信徒の皆さんの近況を、紙面を通して分かち合っていただければと思い、新シリーズ「ひと言伝言板」を開始しました。どうぞ皆さんの近況をお寄せください。

●○○子さんより
今、ガーデニングにはまっています。この夏はブヨの襲撃に悩まされ大変困りましたが、元気でおります。早く皆様とお会いしたいと思っております。

●●野○子さんより
毎日、つつがなく過ごしており、元気でです。
礼拝で早く皆様と会いたいわー！

●●藤真○さんより
・5人目の孫が生まれました。(今日の時点ではまだなのですが…)
・東北の被災地にコロナで何えなくなってしまったので、クリスマスコンサートをビデオレターの形にしてお送りすることになり、今その動画制作のために苦心しています。



・毎朝ラジオ体操と太極拳を近所の方たちと公園で楽しんでいます。

●●吉○子さんより
先日、役員さんから、なかなか教会にも行けない今日この頃、家どこの様に過ごしているか。何か短く書いてお互いにお分かちできるように

しましようのご提案をいただきました。何もとりえのない私には難しい課題のようです。さて私は毎日何をして過ごしているのでしょうか

遠く離れている家族や、友人たちととりとめのない会話を交わすの時には楽しかったり慰められたりします。離れているからこそその話題もあるのかもしれない。そのような場合、なるべく暗い話題や否定的な話題はさけるように気を付けて、話題を選ぶようにしています。誰かと話すというだけでも救われる場合もありますね。

でも、最近ひとつ気づいたことがあります。子供のころから無意識に口ずさんでいた讃美歌の一つに「しずけき祈りの時はいと楽しい」があります。このうたのとおりです。一人祈ることの大切さ。そしてそこから与えられる説明のできないような大きな恵み。イエス様に出会ってよかった。改めてかみしめています。

主日礼拝ライブ配信の回想録

―心地よさを目指して―

1
田〇〇夫

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。」

わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」

コリントの信徒への手紙一

3章6節、9節

I はじめに

世界中にコロナ・ウイルス感染症が流行り始めて、約2年の月日が流れました。最近、毎日マスクミカから流される情報に慣れ親しんでしまったのか、何かものすごく昔の出来事のように感じています。日本では、感染拡大が始まってから一年半が過ぎさり、近頃の「新規感染者の数字が高止まり状態です」との行政発表やマスコミ報道を聞くにつけ、「自分は感染しないだろうか」と多くの人は不安を抱き、さりとて今の状況をどうすることも出来ない虚

今月の 受洗記念日の皆さん

8日 ○野〇子姉

15日 ○嘉〇代姉

29日 ○藤〇美姉

おめでとうございます。



「あなたの御言葉は、わたしのものとなり
わたしの心は喜び躍りました。」エレミヤ書 15章 16節
我が教会のウェブサイト <https://www.jkc-fujigaoka.org/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日朝7時前(9時前))

■牧師室より

しさを感じつつ、ただただ我慢の日々を過ごすこととなっています。それは、もしかすると一年半前「感染の拡大が始まりました(2020年の2月)」との正式な行政発表に

対し、人々は心配を口にしつつも心のどこかで「そのうち終息するだろう」といった安易な受け止め方をし、そしてしまつた事のツケが、このような状況を招いてしまっているのかも知れません。ウイルスたちは、そんな人間の甘さを見透かしたかのように

先月第3、第4日曜日の礼拝後、説明会を開き、私たちが属する東教区の現状と将来予測される事柄に触れました。大変、厳しい現実が突きつけられていると言えるでしょう。

生き延びるための手段として変異を繰り返す、今では一癖も二癖もある手強いコロナ・ウイルスへと成長してしまいました。

その結果、それまで当たり前だった日常生活を営むことが出来なくなってしまうほどの場面を作り出し、更には日本における長い伝統文化によつて築かれてきた生活様式の根底をも覆すほどの驚異的な感染力を見せ、今まさに人間社会を混乱させています。(続く)

一に形ではなく中身に目を向ける必要があるということ。第二に短期的な対応となつてはならないことです。

東教区の次期宣教方策に「新しい教会を目指して」と掲げられていますが、この「新しい教会」が私たちの検討する対応策の鍵となると思います。また直面する困難を、「新しい教会」に生まれ変わるチャンス(好機)と、捉えつつ対応出来ればと願っています。今月も、皆さんのお声を聞かせていただく、時間を設けますので、ご一緒に「新しい教会」について、夢を語り合ひましょう。(佐藤)